

会計情報システムの統合化について

坂手啓介(関西学院大学大学院 商学研究科 博士後期課程)

I 会計情報に対する問題意識と会計情報システム

ASOBAT 以来、今日まで会計の世界、あるいは会計に携わる者の間には共通の問題意識がある。それは、日進月歩の発展を続ける情報技術をどのように駆使し、意思決定者に対して、有用な会計情報を提供するかという問題である。この問題意識は、会計担当者に対する役割期待を拡大させるためには、有用な会計情報システムの構築、運用を会計担当者の責務とする必要があることを意味しているのではないだろうか。

本報国は、会計情報システムを会計担当者に対する役割期待の増大を果たすための手段と位置付け、どのような会計情報システムを構築することが望ましいかについて考察することを目的としている。

II 会計情報システムの類型と発展過程

会計情報システムは情報技術の進歩と肩を並べる形でその形態を変えているが、その変化はおおよそ以下で示すような順序にそっていると思われる。すなわち、まず、他業務情報システムとの連携がない①単独指向型会計情報システムから、情報技術の進歩により、緩やかだが他業務との連携がとれ、会計処理の分散化が可能となった②分散ネットワーク型会計情報システムへと発展した。そして、近年では、各業務情報システムが統合型データベースを介して結合されている統合型経営情報システムが注目され、実際に企業によって運用されており、会計情報システムは③統合型経営情報システム内のサブシステムとして機能するに至っている。

III サブシステムか単一システムか

サブシステムとしての会計情報システムは、他業務情報システムとの連携により、経営環境の変化が要請する組織の変更や、ビジネス・プロセス・リエンジニアリングへの要請にともなう新たな意思決定目的に柔軟に対応することを目的としている。ただし、今後、新たな意思決定目的が生じた場合、新たな意思決定目的を支援するようなサブシステムを追加しなくてはならない。サブシステムの追加がコストやその他の運用上の理由により果たせなかった場合、サブシステムとしての会計情報システムの有用性は低下すると思われる。

では、サブシステムではなく、単一形態のシステムで全ての情報利用目的に応えることのできる会計情報システムは存在するのだろうか。Hollander et al. [2000] で提唱されている REAL (Resource Event Agent Location) システムはその可能性を持っている。REAL システムは Sorter の事象理論から発展している会計データ・モデル研究の一つであり、データベースにビジネス・プロセスに関するデータを保存し、情報の生成に関しては意思決定者にその権限を与えているシステムである。

どのような会計情報システムを構築するかは、様々な問題を同時に考慮せねばならないため、一概に言えない。しかし、単独指向あるいは分散ネットワーク型のシステムとして会計情報システムが機能するには限界があるため、今後は会計情報システムが統合型情報システム内のサブシステムとして機能すべきか、単一のシステムとして同様の機能を果たしていくシステムを導入するかを比較検討する必要があるだろう。